

## 会 議 結 果 の お 知 ら せ

宮古市水産振興ビジョン策定委員会第3回委員会を次のとおり開催しました。

令和6年12月27日

宮古市水産振興ビジョン策定委員会

- 1 開催日時  
令和6年12月20日（金）午前10時30分～午前11時40分
- 2 開催場所  
宮古市市民交流センター1階 会議室1・2
- 3 議題  
宮古市水産振興ビジョン（案）について
- 4 会議の概要  
別添のとおり
- 5 問い合わせ先  
産業振興部水産課水産振興係 電話0193-68-9099

宮古市水産振興ビジョン策定委員会第3回委員会 開催結果

1 出席者（13名）

湯浅啓、伊東道夫、佐藤一彰、寺井繁、前田宏紀、畠山格久司、藤原修一、  
佐々木元、須藤一保、八木澤節子、盛合敏子、大澤糸子、伊藤隆司

2 欠席者（2名）

佐々木克敏、伊藤稔

3 事務局出席者（4名）

産業振興部農林水産振興次長	飛澤 寛一
産業振興部水産課長	中西 秀彦
産業振興部水産課副主幹兼水産振興係長	中野 昇二
産業振興部水産課水産振興係主任	佐々木大輔

4 傍聴者

1人

5 議事等

宮古市水産振興ビジョン（案）について

宮古市水産振興ビジョン（案）について、事務局から説明、審議を行った。一部修正のうえ承認された。

質疑応答内容

質問・意見	回答
<p>【議題「宮古市水産振興ビジョン（案）について」】</p> <p>（委員） 「アユ、サクラマス等の資源を活用した産業振興」とありますが、これは宮古市を訪れた遊漁者が宮古市でお金を使ってくれる観光産業という意味でしょうか。それとも、アユやサクラマス等を活用して商品化をするという意味でしょうか。</p> <p>（委員） 「ブランド化」とは、サケ・マス類のブランド化ということによろしいでしょうか。</p> <p>（委員） ソフト対策として、「ウニの間引き（移植）や昆布移植基材を活用した」とありますが、昆布養殖基材の活用は、ソフトにあたるのかハードにあたるのか、どちらでしょうか。</p>	<p>（事務局） 両方の意味で「産業振興」という表現にしました。お越しいただいた方が食事する意味での産業振興もあると思います。例えば、今ではYoutubeに動画等があることで産業振興につながることもあると思います。大きく捉えた表現にさせていただきました。</p> <p>（事務局） そのとおりです。 また、アユについては、あまり外には出ていないのですが、閉伊川に来た方からは、「閉伊川のアユはおいしい」という評判をいただいています。その辺をもっとPRしていければという意味も含めて、「ブランド化」という表現にさせていただきました。</p> <p>（事務局） ハードとも呼べるのではないかと思いますが、今岩手県と一緒に進めている事業があります。ダイバーが潜って整備するのも含めてソフトと捉えさせていただいています。 （岩手県） 水産庁で「藻場ビジョン」というものを作っています。それに基づいて、岩手県で「岩手県藻場保全・創造方針」というものを策定しています。今ご指摘があった部分について、具体的には、コンブやワカメの養殖技術を活用して海中林を設置したり、母藻を設置したりする取り組みがあります。これらは、国の方でソフト対策に位置付けています。</p>

(委員)

今ご存じのように、漁船漁業は非常に厳しい問題を抱えている中で、「入港する漁船への補助制度の拡充を図る」とは、どのような補助制度を考えているのでしょうか。

同じく、「新たな漁業種を含めて、廻来船の積極的な誘致を行う」とあり、これは旋網船が入ったため継続していきたいということですが、廻来船誘致については、どの辺の地域までを想定しているのか、教えていただければと思います。

(委員)

例えば、廻来船誘致活動で関係者の方にお会いした際に、宮古港に水揚げしてくれることになり、実際に入港してくれたにも関わらず、能力的に宮古ではこれ以上受け入れられませんということにならないようにしなければいけません。廻来船誘致協議会では、それらを踏まえて、せっかく入港してくれても、値段が安かったり、受け入れられなかったりということがないように進めてもらいたいです。(意見)

(事務局)

まず、補助制度でございます。

現時点で新たな具体案はありませんが、今行っている補助制度は氷助成です。これは、継続していきたいと考えています。しかし、これだけではなかなか宮古を選んでもらえないので、これ以外に何が出来るかというところを今後考えていかなければならないと思っています。新たな漁業種を引っ張ってくるためには、何か考えなければいけないということで、記載のとおり表現とさせていただいたものです。

また、新たな漁業種として旋網船を想定しているということでご説明させていただきました。現在、廻来船誘致活動では、北海道及び八戸から福島までの三陸沿岸の、主要な漁港の船主を回っています。その中に、旋網船をターゲットにしたものを加えていく必要があると考えています。以前は、サンマ船の誘致活動で富山にも行っていたと聞いています。旋網船の船主がどこの港所属なのかを調べて、廻来船誘致活動の範囲を広げる、あるいは既存の誘致活動の際にあわせて訪問するようにしていければと考えています。

(委員)

先般の宮古市の12月議会でも、関連する部分を質問している議員がいました。そこで、簡単に言えば、ブロック投入については、受益者負担がないかたちで設置するような流れになっているという答弁を聞きました。どの場所にどの程度ブロックを入れるかというのは、担当の漁協と協議しながら、漁業に影響がないような判断をしていただきたいと思います。今年ブロックを入れたからと言って、いきなり来年たくさん藻が生えてくるということはないでしょうから、実施については、早めに漁協と協議しながら進めてほしいです。どの漁場にどのくらい入れるのか、テトラポットがいいのか、あるいはブロックがいいのか、協議が必要だと思います。

先般、岩泉町で始めた「コンクリートを使った藻場再生の実証実験」というニュースが、新聞に載っていました。何かを入れれば藻が生えてくるというのは昔から言われていることで、そのような点についても、藻場の可能性を探りながら、市と漁協で連携して早めに進めていただければ、今よりも少しは期待ができると思います。

磯焼けをどうにかストップするために、早めに漁場の再生に向けて進めてほしいと思います。

(委員)

東日本大震災津波のときは、40トンのテトラポットも吹き飛んでいるわけです。万が一、同様の津波が来た場合でも耐えられるように、ブロックが良いのか、テトラポットが良いのか、砂地の場合は、40トンのものにするのか、それ以下のものにするのか、選定していただければと思います。

(事務局)

まず、遠洋沖合漁業の項目のところですが、ご意見のとおりだと思います。漁船が入港しても、単価が安かったり、処理能力がなかったりすれば、受け入れられないので、項目の1つ目に「買受能力及び受入体制の強化を図る」と記載をさせていただきました。そちらで、ご了承いただければと思います。

2点目の漁場環境の保全について、先ほど岩手県からもご説明いただいたとおり、漁協と漁業者の負担はありません。今、手元に詳しい資料がないのですが、田老漁協管内で5ヶ所、重茂漁協管内で3ヶ所の計8ヶ所で令和11年度までに実施する予定です。単年度で終わるものではありません。ソフトとハードをセットでという条件で、動いていただいています。今あるものの続きにテトラポットを入れていくという場所もありますし、砂地にブロックを入れるという場所もあります。それは、種を残すという目的と海藻が増えるエリアを増やすという目的で分けていることです。場所については、漁協と県で相談をして決めています。

(岩手県)

委員ご指摘のとおりです。

まずブロックについては、様々メーカーもありますので、漁業者の方々と漁協と十分調整のうえ、どのようなものが良いか十分協議しながら進めていきたいと思います。ブロックを入れても、やはりウニの間引きは必要であると考えています。岩手県沿岸の磯焼けの大きな要因は、海水温の上昇によりウニが多く発生していることなので、ウニの間引きを

(委員)

この実行計画は、資料No.2の7ページ「実績検証」とセットで報告されるのでしょうか。3ページ目にも、目標指標があり、「水産業総生産額」とあります。「実績検証」のところには、「水産業総生産額には、第一次産業、第二次産業、第三次産業まで含む」と書いていますが、何が含まれているのかが伝わらないと思います。漁獲量が減ってきているという中で、水産業総生産額だけを見ると、数値が高く、本当にそうなのかと思う部分もあると思います。

もう少し踏み込むと、7ページの「実績検証」のところには、第一次産業から第三次産業の中で、何の生産額が一番高いのかを記載した方が、一般の方にはわかりやすいと思います。

サケが獲れていないというのは、皆さんご承知だとは思いますが、それではなぜ水産業総生産額は伸びているのかという説明が必要なのではないかと思います。

しなければいけません。田老町漁協にもご協力いただいて、ウニの間引きをしていただいています。ブロックの選定については、ウニの間引きへの影響など、管理とセットで協議しながら進めていきたいと思っています。

また、ブロックの大きさについて、津波に対応するというのは非常に難しいことです。基本的には、通常の荒天時や、30年に1度程度の高波に対して、耐えられるかどうかという考え方で進めています。津波対応になると、大規模なものになってしまい、非現実的なブロックになってしまうと思います。

様々、関係者と協議しながら進めていきたいと思っています。

(事務局)

関係者は分かっているけど、一般の方々には分かりにくい部分があると思います。どのような表現にするかはお任せいただき、記載する方向で検討させていただきます。

(委員)

「漁協組合員数」について、目標値の2,073人とは、正組合員と準組合員を合わせた数字なのではないでしょうか。

現在、3漁協の組合員数も高齢化等によってどんどん減っています。2,073人ということは、平成30年度の数値を目標値にしていますが、組合員数が今後増える要素はかなり少ないのではないかと思います。漁業者は、減っていくと認識していると思いますが、この数字だと認識が合わないのではないかと思います。

(委員)

目標値は目標値でそのとおりで良いと思います。過去、現在、未来を見ながら、見直した数値を一度提示することも必要なんじゃないかと思います。私の素人考えで、組合員数は、もう増えることはないのではないかと感じているので聞きました。

(事務局)

2,073人というのは、前回ビジョンを作った際の、令和6年度の目標値です。実績は、7ページに記載のとおり1,788人で、これは正組合員と準組合員をあわせた数字です。また、冒頭でご説明したとおり、本来は人口減少を踏まえた数字にすべきだと思います。現状維持をするのも大変な状況だと思います。上位計画との関係で、目標値は、そのまま1,788人とさせていただければと思います。

(事務局)

我々もそれは感じていて、今回数字を落とすことも考えました。現在の人数を維持していくのは大変なことだということは、我々も理解しています。次回の見直しの際、人口減少を考慮した目標値にしたいと思います。今回は、頑張りたいという思いを込めて、現在の組合員数を維持するというにしたいと思います。

(事務局)

3ページが今回の計画の数字です。

先ほど訂正させていただきましたが、人口減少率を含めて計算した結果、目標値として予測される数字は、訂正前の1,653人、これが恐らく現実を見た上での目標になるのだと思います。それくらいが妥当ではないかということで算出しましたが、上位計画との兼ね合いで訂正できませんでした。しかし、目標値としては、現実に近い数字で、現状維持は非常に厳しいのだろうと思っています。しかし、今回の見直しでは、このまま現状維持を目標にしたいと考えております。

(委員)

「Uターン・Iターン等の新規就漁者の増加に向けて」とありますが、追記してほしいことがあります。今年の春から、地域おこし協力隊として、漁業者または漁協職員として就業することができるという取り組みを市で実施してもらっています。このビジョンは、ホームページで見ることができると聞いたので、そのような文言を入れてもらえれば、気付いてくれる人も増えると思います。

(委員)

海業を国も県も推進していて、その中には漁港施設も含まれています。シーカヤックの団体と漁協が連携して、港を使ってもらうことでお客さんを集めるという取り組みを全国でやっている事例もあるようです。他団体の協力も得ながらやっていくのも良いと思います。

(委員)

今、ナマコとウニの養殖に取り組んでいると思うのですが、現在どの程度まで進んでいるのでしょうか。

(事務局)

地域おこし協力隊に関する文言は加えることとして、書き方はお任せいただければと思います。

(事務局)

三陸の海は、シーカヤックをやる団体にも高評価のようです。宮古市にも団体はありますが、全国からわざわざ船を積んでシーカヤックをしにくる人もいます。シーカヤックに限らず、ヨットなどもあるのですが、そのような団体とも連携して、海を様々な形で活用できるような取り組みをしていくべきだと思いますので、そのような文言を記載していきたいと思いますが、そこまで詳しくは記載できないと思うのですが、この計画に少しでも入れておくと、今後取り組みやすくなるので加えたいと思います。

(事務局)

田老町漁協で1年半弱、複合養殖という形でウニとナマコをセットで取り組んでいます。

まず、ナマコは、水槽掃除の観点でいうと、だいぶ効果があるとのこと。壁面の苔等を食べてくれるので良いとのことですが、投入した個数より数は減りました。大きくなるのは大きくなりますが、小さくなっていないものもいるようです。そのため、複合養殖という観点では、ナマコは適していないのだと思います。しかし、ウニを養殖するにあたっては、ナマコを入れた方が、メンテナン

<p>(委員)</p> <p>冬季間は主にどのようなエサを与えているのですか。</p>	<p>スや維持管理には大変役に立つという話です。</p> <p>昨年11月、12月頃に、中が空の状態のウニを1回目で入れています。それが、身が入って、売り物になるまで半年くらいかかりました。半年だと、少し飼育期間が長いと思っています。その後、5月、6月の早い段階で獲ったものを、白子が出ないように飼育をして、口開けが終わるお盆前後に2回販売しました。その点については、ある程度成果が出たと思っておりますが、投入が遅れたものの中には、白子が出たものが結構あるようです。もう少し研究していけば、年3サイクルくらいはできるのではないかとというのが、今のところの成果です。</p> <p>今のところの欠点が、移植で獲ったウニは、死にやすいということです。ダイバーが環境保全のために手で獲ったものは、死にづらく、管足が抜けたものは、死にやすいようです。生存率を高くやっていくのが、商売として成り立つかどうかのボーダーラインになるのではないかと思います。口開けで獲ったウニも入れてみたそうなのですが、ダイバーが獲ってきたものより死にやすいようです。</p> <p>それらを踏まえて、今年は、漁業者の方を対象にした閉鎖循環方式の陸上養殖に対する補助制度を新たに作り、取り組んでいるところです。徐々に成果が出てくれば良いと思っております。</p> <p>(事務局)</p> <p>天然があれば天然昆布の間引きしたものを食べさせています。昆布がなくなる10月から11月頃からは、各漁協で持っている様々な海藻類を与えています。田老町漁協は、年中海藻だけで育てています。</p>
---	--

(委員)

河川整備も追記してほしいです。植樹活動だけで、保全・防災というのは難しいと思いますので、「地震、津波、高波」のところに「ゲリラ豪雨」と表記して、「漁港施設」のあとに「河川整備」と入れていただきたいと思います。森が伐採されていて、それが育つまで30～40年かかり、その間にたくさんの砂利などが流れてきます。アユやサクラマスブランド化を図るうえでは、必要なことだと思いますので、加えてほしいです。

(事務局)

追記したいと思います。他課にも関係するところですので、入れ方はお任せいただければと思います。